あなたが主役！

地域の笑顔広がる まちづくり協議会

現在、市内11地区で住民自治を行うまちづくり協議会（まち協）が立ち上がり、住民と行政が一緒になってまちをよくしていこうと活動しています。協働のまちづくりの中心的組織として、地域の特色を生かしたさまざまな活動に取り組むまち協。今一度その活動の意味を考えてみましょう。

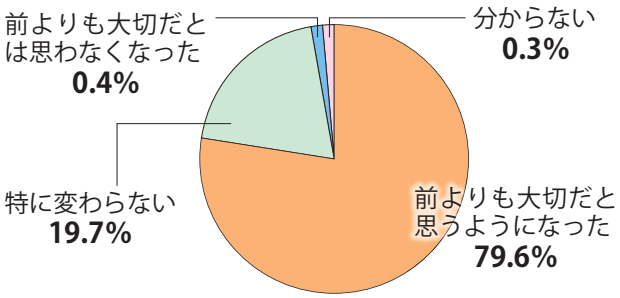
①妻ケ丘地区の元気づくり歩こう会
②祝吉地区で行われた車いす体験による公園の点検
③五十市地区で開催されたグラウンドゴルフ大会
④庄内地区まち協が開設したホームページ
⑤西岳地区まち協で作製した西岳景勝地マップ
⑥志和池地区で南九州駅伝を前に行われた道路の清掃活動

見直される地域のつながり

これまで地域住民は強いつながりを持ち、田植えや稲刈り、冠婚葬祭など、生活に関わる多くの部分を地域で助け合ってきました。最近では社会環境が変化する中で、生活様式や個人の価値観が多様化し、近所付き合いが希薄になってきています。

しかし、一昨年に起きた東日本大震災では、隣近所の住民が声を掛け合い命が助かったことなどが報道されました。このときの教訓から、日頃の近所付き合いや地域のつながりを見直そうという意識へ変化してきています。

震災前と比べた社会における結びつきの意識変化



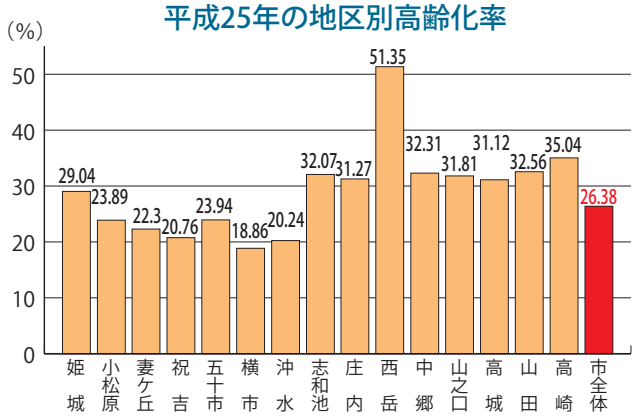
※内閣府「社会意識に関する世論調査」（平成24年１月調査）
回答者は、全国の20歳以上の6,059人

地域の抱える課題

市はこれまで、生活の基盤となる道路や地区公民館などの施設の充実を目指してきました。しかし、施設が整備された次の段階では、住民がいかに幸せで地域が充実しているかが求められるようになりました。それに伴い、地域への要望も多様化し、地域の抱える課題も複雑になっています。

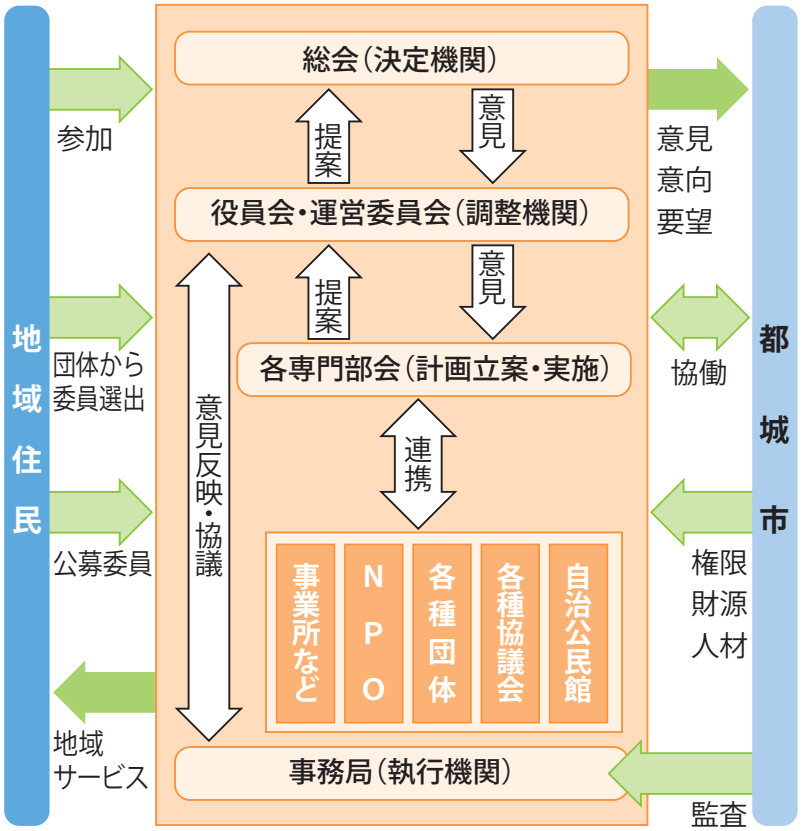
また、核家族化や一人暮らし世帯の増加などから地域で行われる行事への参加が減ったり、高齢化の進展で組織の弱体化や地域を担う人材不足が生じたりするなどの問題も顕在化してきています。

平成25年の地区別高齢化率



※１月１日現在の住民基本台帳人口（住基人口）に基づく数値

まちづくり協議会の組織例



まち協の役割

このように多様化する地域の課題や要望に対し、地域のことは地域で解決していこうと、まち協が設立されました。

まち協の組織は、団体や事業所などから選出された委員や地域住民から公募した委員から構成。地域に何が必要かを検討したり、地域の課題を洗い出したりしてよりよい地域にするための計画を立案し、事業を実施しています。

実施に当たっては、地域の自治公民館や各種協議会、NPOなどの既存組織と連携・協力しながら進めています。

まち協には、市から権限や財源が移譲されていて、地域内で行う事業についてはまち協が予算配分なども行い、それぞれの地域の特色や地域に残る歴史資源などを生かしたまちづくりを行っています。

地域の未来へのワンステップ、それがまち協の役割です。

まち協設立でどう変わる？

現在、祝吉地区では、子どものためのキャンプや映写会を行ったり、絵画展を開催したりして子どもたちの地域参加を促しています。また、高齢化率の高い西岳地区では、認知症サポーター養成講座を開催し、高齢者に優しい地域づくりを進めています。五十市地区では、ウオーキング大会に地域の史跡巡りなどを組み込み、地域を再発見し、見直す取り組みを行っています。

このように、そこに住む人がアイデアを出し合い、地域の課題や特色に合った事業を展開しています。その地域の特性を生かした独自性のある取り組みが、まち協を中心に始まっています。

主役は市民の皆さん

それぞれの地域の住民が主導権を持ち、行政がサポートしながら、さまざまな問題や課題を解決するために活動しているまち協。現在、市内11地区で設立され、残る4地区でも設立に向けた検討が進められています。

市では、まち協が自立した活動ができるよう「我がまち交付金」を交付しています。

この交付金の一番の特徴は、地域で使い道を決めてもらうことにあります。地域住民が何を重点的に進めていくか意見を出し合うことで、自分たちの願う地域に近づけることができます。

地域を自分たちの力で、さらによくしていきましょう。

インタビュー

祝吉地区
子どもまちづくり協議会
山口　紗嬉（さき）さん
（川東小６年）

祝吉地区では、20人の小学生や中学生が「祝吉地区子どもまちづくり協議会」の委員になっていて、まちづくりに関する意見を述べたり、早水あやめまつりなどのイベントにボランティアとして参加したりするなどして、地域のまちづくりに参加しています。

私もみんなの役に立ち、この地区を住みやすいまちにしていきたいと思い、昨年に引き続き参加しました。みんなの前ではっきりと自分の意見を述べられるように頑張りたいと思います。

横市地区 まちづくり協議会の挑戦

横市地区は蓑原町、横市町、南横市町、都原町、久保原町（一部）からなり、北部は横市川沿いに広がる農業地帯、南部は住宅や店舗、学校、福祉施設などが集まる市街地区域となっています。当地区は、市内でも人口の流入が多い地域。古くからこの地域で農業を営む人たちと、新たに移り住んだ子育て世代の人たちとの混住化が進む地域です。

2月16日に開催された熱気球搭乗体験

続いて、横市地区まちづくり協議会（横市まち協）に焦点を当てて、鎌田久雄会長と坂元三郎事務局長にまち協の取り組みなどについて聞きました。

手探りの中でのスタート

横市まち協は平成22年8月、地域の抱える問題の解決や、希薄になりつつあった地域のつながりを見直す目的で設立されました。

横市まち協の役割は、地域の各自治公民館組織や民主団体の横断的な連携強化。手探りの中でスタートした横市まち協は、平成23年と24年に、地域の名所や史跡と主だった施設などを紹介した「横市マップ」と「横市ガイドブック」を作製しました。これらは地域の各世帯に配布して利用してもらうだけにとどまらず、地元小中学校の社会科などの教材として、また地域で開催するイベントにも活用されています。

特に昨年開催された都城地域の隠れた魅力を再発見するイベント都城盆地博覧会（ボンパク）では、これらを利用して母智丘公園周辺と地域内に所在する史跡を巡るイベントを開催。市内のまち協として初めての試みであったにも関わらず参加者にも好評で、横市地区の魅力を知ってもらう良い機会となりました。その成功に鎌田会長は「まずは自らが地域を知ることが大切」と手応えを感じています。

横市地区まちづくり協議会
会長　鎌田　久雄さん

◀横市地区まちづくり協議会のブログでも活動内容がご覧になれます

まちづくりに必要なもの

自治公民館や社会教育関係団体等連絡協議会（社教連）、民主団体、事業所などが参加するまち協。そのとりまとめには、リーダーの果たす役割が重要です。横市まち協では、地域でさまざまな役割を果たしてきた人たちが発足当初から役員として携わることで、団体間の連携強化を図っています。

また、「横市地区は社教連をはじめとする民主団体や自治公民館活動が根付いていたからこそ、スムーズにまち協の活動を始めることができた」と話す坂元事務局長の言葉が表す通り、地域の組織や団体の協力も不可欠です。

横市地区まちづくり協議会
事務局長　坂元　三郎さん

発足後、横市まち協では、社教連などから引き継いだ夏祭りや文化祭などの企画・運営も担っています。鎌田会長は「これまで培った地域や住民間の絆があるからこそできること。一人一人が、自分の役割や存在の意味を実感できることが何よりも大切」と訴えます。

「地域の課題は、自らの判断で解決することが基本」と話す坂元事務局長。特に、イベントの企画から運営までのマニュアル作りには余念がなく、生産現場での管理業務を円滑に進めるための手法「PDCAサイクル」の考え方を取り入れて、魅力あるイベントづくりに役立てるとともに、誰もがまち協の活動に参加しやすいよう気使っています。

PDCA サイクルのイメージ図

レポート 広報委員会

住民が必要とする情報を、いかに分かりやすく発信するかが大切と話す坂元事務局長。横市地区では２カ月に１度「広報よこいち」を発行していて、文字の書体や大きさなどにも注意を払いながら、地域の人たちに身近な話題を伝えています。

２月に開催された広報委員会では、広報紙で紹介する地域の行事や活躍した人などの情報交換、掲載内容の検討が行われました。また、自治公民館に加入していない世帯に対する広報紙の配布方法も検討され、地域のみんなが参加できるように情報の提供に努めています。

活発な情報交換が行われた広報委員会

皆さんの参加がまちづくりの第一歩

先月号の特集と合わせて、市内各地区のまち協の取り組みの一部を紹介してきました。

現在、設立に向けて準備中の地区も含めて、各地区のまち協が、自らの手で「住みよいまち」「笑顔広がるまち」の実現に向けて取り組んでいます。取材を進める中で、まち協に関わる皆さんの独創的な発想力、それを実行し実現するための行動力と地域の絆には、まち協の未来を感じることができました。

まち協が目指す未来は、地域の人たちみんなの参加があってこそ、はじめてスタートラインに立つことができます。あなた自身が地域の行事や催しに参加することが、誰もが「住みよく、そして楽しい」と感じるまちづくりにつながります。

まちづくりの主役はあなた自身です。まずは、地域の活動に参加して、自分のできることから始めてみませんか。きっと新しい出会いや楽しい発見があるはずです。そしてそのことこそが、まちづくりへの参加の第一歩なのです。